for Adult only
PuniPuniTime
プニプニタイム
ONIGIRIズ

for Adult only
PuniPuniTime
プニプニタイム

奥付
■プニプにタイム
■発行　ONIGIRIズ
■発行者　CUTEG、Hypar
■発行日　２００９・０７・２０
■印刷　DONGBO PRINTING
E-MAIL
Hypar　（文）　：hypar@hotmail.com
CUTEG　（絵）　：yoonji.km@gmail.com

本書のすべてまたは一部を無断に転載・複製・複写することを禁じます。
P2Pやネットサイトへのアップロードは一切禁じております。

FOR ADULT ONLY

http://blog.livedoor.jp/onigiriz/

こんちわー

あ、唯
来たんだ

あれ？
澤ちゃんだけ？
みんなは？

見ての通り。
みんな用事があって
今日はこれないって

うー
じゃ今日はムギちゃんの
おやつはおあずけかな？
あんたは部活におやつを
食べるためにきてるのか？
そんなこと言わないで
二人だけで練習しよう。
もー
わかったよー
それじゃ、
始まるよ？
1、2、3
ゲー

もう、唯は本当に仕方ないな、ちょっと待っててて

本当は練習が終わったら食べようと思ったんだけど…

わぁ おいしそう！ はやく！はやく 食べさせて！

はいはい、わかったから。

キャッ！

くしゅっ

うわっ

ごっ、ごめん！
唯！大丈夫？

う、うん。
別に怪我とかは
ないけど…

どうしよ…
着替え持ってないのに…

あの、唯
私のでもよかったら
これでも着てみる？

わぁ、ありがとう，澪ちゃん。
助かったよ

あ、でも
そのまま家に帰る
わけには
いかないだろ？

あとで憂ちゃんに
電話して着替え
持ってくるように
するから大丈夫。

ん？

RRRRRR

あ、律？ うん。
どういうこと？
しょうがないな。
わかった
ちょっと待ってて。

あの…
唯、私ちょっと
出かけてくるね。
すぐ戻るから。

ガラララー。

そういえば
澤ちゃんのクラス
今日
体育あったよね。。

ムン

ムン

ぐっ〜
んっ…やっぱり…澪ちゃんの匂いがする…
あっ…
ちょ、ちょっとだけならいい…かな。
んっ…

澪…ちゃん…
ふう

唯、ごめん、律のやつがさ…

ゆ…い？

…

うう…

澪の体育着の匂いを嗅いたらつい頭がぼっとして…

ば、バカ

恥ずかしいからそんな話やめて！

と、とにかくごめん！許して！

わ、わかったからそんなにあやまらないで！

あ…あのさ…唯許してくれるかわりに私のお願いも聞いてくれない？

ん？な、なに…？

あ、あの…わ、わたしも唯の匂い…嗅いでみたいんだ…

えっ…ええっ？

んっ…
ううん…

み、澪…
くすぐったいよ…

…ここの匂いは…
どう…かな

み、澪ちゃん！
だ、だめだよ
そんなとこ…
き、汚いよ…！

ひゃうっ！

ちゅ…
ちゅぱ…

うん…

アッ…
あんっ…
み、澪ちゃん…

もうやめ…

み、澪ちゃん…あそこが変だよ…濡らしそう…

きゃっ！！

はぁ…はぁ…
うう…澪ちゃん…
ひどい…
やめてっていったのに…

で…でも、
私も唯が言ってた
ことがわかった
気がする…

ご…ごめん
私も唯の匂い嗅いだら
やめれなくて…

きゃー
やめろ！

そう？
それじゃ、
今度は私の番ね！
えいっ！

ジェラシー？

「あずにゃん、こんちーわーっと」
唯が部室に入ってきてすぐに椅子に座ってギターをいじっていた梓に抱きついた。
「わあっ！唯先輩！苦しいです！離してください…っ！」
「やだもん～えへへっ、えいっ！すりすり」
梓が軽音部に入学してから、梓はだっぷりと唯に可愛がられていた。今日もあいかわらず、唯は梓にぺったりとしていた。
その時だった。机を手で叩く大きな音がする、唯が驚いて音が鳴った方向をを振り返った。そこには澪が机に手を置いたまま唯を睨んでいた。
「遊んでる時間がない、早く練習の準備をしなさい」
「あ…えっ…う、うん。わかった…澪ちゃん…」
冷たい澪の口調に唯が慌てて自分のギターを手に取り練習の準備を始める。律や紬が澪と唯を交代に見ながら困った表情をした。律は自分のベースの弦をいじっている澪の方を掴む。
「澪、何で怒るんだよ？いつものことじゃないか」
「演奏会まであんまり時間がないのに遊んでばっかだからだよ」
「おいおい…」
「律もくだらないこと言わないで早く練習の準備でもしたら？」
澪が律の手を振り払う。律が澪にさらになにかを言い出そうとしたが、紬が律の背中を指でそっとつっつく。
「なんだよ、ムギ」
「今はなにも言わないほうがいいわよ」
そこまで言って、紬は手のひらを頬に当ててくすっと笑った。
「あらあら、そういうことか…くすっ」
「えっっどういうことよっ？」
「今日は澪ちゃんが気が立っているようだから、そっとしておいて」
「あ…う、うん」
練習が始まった。一曲目が終わった後、唯は梓にぺったりとくっついて、梓をべた褒めしていた。
「もう、あずにゃん、本当すごい演奏だったよ！お姉ちゃんが褒めてあげる！」
そういって梓の頭を撫でる。その時だけはあずにゃんも恥ずかしいからやめてくださいと、短く言ったもののまんざらでもなさそうに顔を赤めていた。
「あずにゃん、えらい、えらい」
「もう…唯先輩ったら…」
その時だった。ジーンと部室内に大きなベースの音が鳴る。
「あれ、澪ちゃん、どうしたの？」
唯が心配そうな顔で澪のほうを見るが、澪は唯をわざと無視するようにベースを片付けて、部室の扉を開けながら短く言い放つ。
「…今日調子が悪いから先に帰る。ごめん」
律が澪を追いかけようとしたけど、またも紬に制止された。唯と梓はなにが起こったのかまだ把握できなかったらしく、目をパチパチしているだけだった。
そして紬がパンと手を打ちながら話す。
「今日はこの辺でやめようか」
「で、でも…」
律が困った表情で紬のほうを見ていると紬が律にこそこそと耳打ちをする。
すると律が唯のほうをちらっと二回見てはしょうがないな～という表情をした。
「なら、しかたないか、じゃ今日は帰るぜ」
紬と律が機材を片付けはじめるとやっと唯と梓も正気に戻って二人を手伝った。
「あの…澪ちゃん、大丈夫かな？」
唯の質問に紬がにっこりと笑いながら話した。

「さぁ、それは唯ちゃんの次第だと思うな…」
「えっ？なんであたし？」
「もう、唯ちゃんは本当に鈍感だから…そうよね？律」
「ああ…そうだな」
「なによ、律ちゃんまで…」
律と紬が顔をあわせてくすくす笑っていたが、唯だけはわけをわからず、頭を傾げているだけだった。

そして、次の日――

澪が部室の扉を開いて入るとそこには唯しかいなかった。唯が手を上げて軽く挨拶をする。
「ちーす、澪ちゃん」
「よう…唯、みんなは？」
澪がきょとんとした表情で唯に挨拶を返す。
唯が困った風に笑いながら話を続けた。
「みんな、なんか用があるらしくてさ…今日来れないって」
「そう…じゃ、今日の練習は休みか」
そう言って、美緒は踵を返そうとした。そんな澪を唯が呼び止める。
「ちょ、ちょっと待って、澪ちゃん」
「？」
唯がテーブル上に置いているケーキを指差さす。
「あの…ムギちゃんが澪ちゃんと一緒に食べてねってケーキくれたから…一緒に食べない？」
「…はぁ」
澪はため息をついて、荷物を置いて、テーブル前に座った。
「…それでね！あずにゃんがね…！」
澪と二人でケーキを食べてる間、唯はずっと梓の話題ばっかだった。
澪は最初は〝へぇ〜〟や〝そう…〟など適当に返事をしていたけど、いつのまにか澪は返事をしなくなっていた。
澪の態度がどこかおかしなことに気づいた唯が心配そうな顔で澪を見つめた。
「…あのさ…澪ちゃん？だ、大丈夫…顔色が悪いんだけど…」
「…めて」
「えっ？」
澪の言葉はよく聞き取れない。唯はぽっと澪のほうを見た。
「やめてよ…なんで、梓の話ばっかしてるんだ？」
「…澪…ちゃん？」
「…唯のバカ…」
「え…えっ」
澪が椅子から起きてかばんを手に持つ。
「み、澪ちゃんちょっと待って！」
唯が慌てて澪の手首を掴んだ。澪はその手を振り払おうとするが、唯はその手を離してくれない。さらに唯が澪を手を強引に自分のほうに引く。
それにつられて、澪はバランスを崩して倒れようとした。
それを唯が両手を広げてガッチリと支えた。結局澪は、唯に抱きしめられるような形になってしまった。唯が逃がさまいと澪の背中に腕を回して一層強く澪を抱きしめる。
「…澪ちゃん…最近なんか変だよ。私がなんか悪いことをしたの？話してくれない？」
「…変なのは唯のほうだよ…」
「えっ…」
澪がぽつりとつぶやく。唯は澪の言葉の意味がわからなくてきょとんとしているだけだった。
「…唯が…私にかまってくれないから…いつも梓と話して、私には話しかけてくれなかったら…私が嫌いになったんじゃないかなと思って…なんか寂しくて…それで気が立っていて…」
そこまで言って、澪が黙り込む。その時だった、唯は澪から離れて両手を澪の肩に乗せた。

「澪ちゃん…ちょっと、こっち見て」
「えっ？」
澪が顔を下に向き、きょとんとした顔で唯を見下ろす。唯はふうと一回深呼吸をして、かかとをあげ背伸びをする。そして、そのまま澪の唇に自分の唇を重ねた。
「…澪ちゃん、唇にクリームついていたよ」
「えっ…」
唯が頬を赤らめる。澪はいきなりのことで、目をパチパチしているだけだった。唯はちょっと恥ずかしそうにうつむきながら話を続ける。
「ごめんね、澪ちゃん…でも、うれしいな…」
「えっ？」
「澪ちゃんが私のことをそんな風に思ってくれて」
「…うん」
「…私ね、澪ちゃんが大好き…だけど、くっついたり、抱きついたりしたら澪が嫌がってたから…だから」
唯の言葉に澪の顔が一層赤くなってしまった。澪はうつむいて小さな声で返事をした。
「…実は…嫌いじゃないよ…唯が抱いてくれたりするの、すごくうれしいけど…みんなの前で恥ずかしかったから…」
その話に唯の顔がぱっと明るくなった。そして、いたずらっぽい表情で澪のほうを見た。
「あのね…澪ちゃん」
「…うん？」
「じゃ…今、澪ちゃんを抱いてもいい？」
「うん…いいよ…」

☆　☆

☆

「ゆ、唯！」
「なに？澪ちゃん」
唯は澪に抱かれてその胸に顔をうずめていた。
「う～ん、いい匂い」
「ちょ、ちょっと、唯…」
澪が困った表情で唯を見下ろす、しかし唯は澪の話は聞こえないように、ただ胸に顔をすり合わせていた。
「やわらか～」
「あうう…唯～もうやめて～」
それ聞いた唯がいきなり、顔を澪の胸から離してぷいっとそっぽを向く。そして、わざとらしくほおを膨らませすねたような表情をした。
「なんだ、澪ちゃん…私がこういうことするのやっぱり嫌なんだ…、ふーん、じゃ、まだ、あずにゃんといちゃいちゃしようかな～」
すると、澪が慌てて両手を全力に振りながら、涙目になって唯を見つめた
「こ、ごめん、ゆ、唯、そんなんじゃないんだ…」
そんな澪の話に唯が一歩、前へと近づきながら上目づかいで見つめた。そしてにこっと笑いながら口を開いた。
「じゃ、澪ちゃん…キスしてくれたら許してあげる」
唯が目を閉じて唇を差し出す。
澪は、そんな唯を見下ろしながらおどおどした。
すると、唯が目を開けて、すねたようにつぶやく。
「やっぱり…嫌なんだ…いいもん、私はあずにゃんとキスしちゃうもん」
「そ、そ、そんなんじゃない！する、するから！」
澪が決心したように唯の両肩を掴む。唯はまた目を閉じて、顔をちょっとだけあげて、唇を前に出す。澪は赤くなった顔でおそるおそる自分の顔を唯の顔に近づける。
そして
唯の唇にそっと自分の唇を重ねた。
「…んっ」

唯の唇の隙間から溜息が漏れた。唯の息が澪の唇に触れる。気持ちよさと恥ずかしさの感情がこみ上げてくる。澪は慌てて自分の唇を離そうとする。

「えいっ」

いきなり、唯が自分の腕を澪の首に回して、ぎゅっと抱きしめる。

「ううっ」

二人の唇は触れたままだ。その時、唯の舌が澪の唇の間に割り込む。そして、唯の舌が澪の舌を絡みつく。

「んっ…」

澪の全身から力が抜けた。

さらに、舌は澪の口の中のあっちこっちを嘗め回す。唯の舌が澪の口の中を擦るたびに澪の体がぶるぶると震えている。

唇を重ねたまま、唯が手を動かし、服を脱がせていった、澪が下着姿になってから唯がやっと唇を離した。すると、全身から力が抜けたように澪がその場に座り込む。

「んっ…気持ちよかった。澪ちゃんの口の中」

唯の話にやっと澪が正気に戻った。

「なっ。なっ…ちょっと唯、恥ずかしいよこの格好…誰か来たらどうしよ…」

「大丈夫だよ。今日は誰も来ないから」

唯が悪戯っぽい笑いを浮かせて澪に近寄る。

「さっきは、澪ちゃんが私を気持ちよくしてくれたから、今度は私が澪ちゃんを気持ちよくしてあげるね」

「さっきも唯が勝手に…なっ！」

唯が澪に抱きつくと澪はその場に倒れてしまった。おかげで澪の体の上に唯が乗っているような形になった。

「えへっ」

唯はにこっと笑って、澪の胸に手を伸ばす。そしてブラの上から澪の胸を手のひらで撫でた。

「あっ…唯…やめ…」

「…澪ちゃんの胸、すごくぷにぷにしてる」

そんなことを言いながら唯の手が澪のブラを上にずらす、ずらされたブラの下から澪の膨らみが現れる。唯はその膨らみを包むようにゆっくりと手を載せた。

「きゃっ！」

唯は澪の首筋を舌で愛撫しながら、手で澪のふくらみを丁寧に撫で回す。手の平が膨らみの先端をかすめるたびに澪の口からは甘い声が漏れる。

「あっ…はぁっ…そこ…だめぇ…」

「澪ちゃん、どう？気持ちいい？」

「あっ、はぁっ…しら…ない…」

澪は赤くなった顔で必死的に顔を逸らす。唯が澪の乳首を指でつまみあげて耳元にささやいた。

「でも、澪ちゃん、

乳首がこんなにツンツンになってるよ。すごく気持ちいいでしょ？」

そう言って、唇を首筋から肩骨を伝ってゆっくりと移動させていく。

唯の顔が胸元まで降りた。唯は舌を出して、澪の乳首をつつつく。

「あっ…はうっ…」

指とは違うやわらかい刺激に澪の体がピクンと震える。

そんな澪をかわいいと思いながら、唯はゆっくりと澪の胸を口で含めた。口の中で舌で澪の乳首を転がす。

「…はぁん…あんっ…」

澪は全身に流れる快感にただ荒い息を漏らしていた。

いきなり、唯が口を離して、ニコニコと微笑みながら澪を見下ろす。

「澪ちゃん、苦しいの？やめちゃおうか？」

わざとらしい言葉に澪が手を伸ばし唯のほほを触りながら半泣き声で唯に強請る。

「ゆ…唯…やめないで…」

唯がそんな澪を見て微笑む。

「そうか。やっぱり、気持ちよくしてほしいんだね。それじゃもっといいことをしてあげようかな」

くすっと笑った唯は今度は澪の下半身のほうに顔を近づける。澪の縞々のパンツに顔を近づけながら鼻をくんくんと動かした。

「澪のここ…思ったとおりすごくいいにおいがするね」

「ゆ、唯、ダメ！恥ずかしいよ！」

唯の行動に手で顔を隠しながらほほ、泣き声に近い声を発していた。しかし唯はそれにかまわず、澪のパンツに顔を埋める。

唯の息が下着越しに感じられる。暖かい息に触れて、澪の体からまた力が抜けながら声を発さなくなってしまった。澪はただ恥ずかしさと気持ちよさに荒い息を漏らしているだけだった。

そして、唯が下着を歯で噛んで下におろす。澪の下半身がすべて露になると唯が目をキラキラしながら澪の恥ずかしい部分を眺める。

「わぁ…澪ちゃんのあそこ…すごく綺麗…」

「…あっ…」

澪はまだ顔を隠して恥ずかしがっていた。唯はそんな澪の大事な部分に顔を近づかせる。うっすらと生えている下の毛を掻き分け、澪のスジに口付けをした。

「はうっ！」

澪の体があまりの快感に跳ね上がる。そして、口をづけたまま舌を出して秘部の入り口を柔らかく嘗め回した。唯の舌が動くたびに澪は体をピクッとさせながら喘ぎ声を漏らす。

「は、はうっ、唯…もう、だめ…体が変だよ…力が入らない…」

「…澪ちゃん…すごくかわいい…大丈夫…痛くないようにするから…」

澪の下半身から顔を離した唯が再び姿勢を変え、澪にキスをする。

「んちゅ…」

唯はキスをしながら澪の胸を撫でている。その手はゆっくりと、胸から腹へ動いていた。そしてしばらく澪の腹を撫でていた手を澪の秘部に伸ばした。

「あっ…あんっ、…」

唯の手の感触に澪が甘い吐息を漏らす。

その吐息の声を聞きながらゆっくりと淫核を指ででつまみあげては軽くこする。

「はうっ…！」

まるで電流を流したような快感が澪の体の中を走る。大事なところから甘酸っぱい蜜が漏れていた。

「ほら、澪ちゃん、こんなにぬれてるよ」

唯が自分の手の平を広げて澪に見せてあげる、その手には澪から出た蜜がべっとりとついていた。唯は指を自分の唇に近づかせてその蜜をおいしそうに舌でなめとっている。舌と澪の蜜が絡まれてくちゅくちっと卑猥な水の音がした。

「うん…澪ちゃんのおツユ、おいしいね」

唯はまだ手を澪の下半身に伸ばす。今度は中指を立てて、澪の大事な部分をこすりはじめた。

ぴちゃっ…くちゃっ…

指と愛液が摩擦され卑猥な水音を出す。

「それじゃ、入れるね…」

唯の指がゆっくりと澪の秘部へと吸い込まれていく。最初はちょっと抵抗があったか、指のひとつめの関節まで入った後はスムースに指が入るようになった。

「ひやっ！」

異物が入る感触が快感に変わり、澪の体が激しく震える。先までのとはまた違う感覚が澪の全身を襲う。

唯は舌では澪のクリトリスを愛撫しながら速度をあげて秘部に指を入れていく。卑猥な水音はさらに大きくなっていた。

「はっ…あっ…はうっ…はぁっ」

段々と澪の喘ぎ声が激しくなって、間隔が短くなってきた。

「あぁっ！唯、私…！あああっ！！」

澪の体からがっくりと力が抜ける、唯の指が澪からぬけると同時に秘部からピュッピュッと透明な液体が飛び出して、唯の顔に降り注ぐ。
唯はそれを指で拭き取って舌で舐めながらうっとりした表情を浮かべていた。

「…んっ…澪ちゃん、おいしいおつゆがいっぱい出たよ？」

しかし、澪はあまりの快感に軽く気を失っていた。唯はそんな澪の頬に軽く口付けをした。

☆　☆　☆

二人は手をつないだまま。夕暮れの道を歩いていた。二人は会話もなく、ただ顔が赤くなったまま前を歩いているだけだった。そして、分かれ道が出た。そこで澪と唯は立ち止まってお互いを見つめる。

しかし、二人は手をぎゅっと繋いだままだった。

その時だった。どこからか紬の声が聞こえる。

「あらあら、これはこれは、いい物を見せてもらいました」

紬のいきなりの登場で二人が驚く。

「あれ、ムギちゃん？どうしてここにいるの？用があったんじゃ…」

「用はちゃんと済ましましたよ？」

そう言いながら紬がカバンからデジカメを取り出す。

「さっきの二人のあ～つい様子を取っていましたから。うふふっ」

「ちょ、ちょっと、ムギ！それは！」

「最近、澪ちゃんの様子がなんか変だったので唯ちゃんのせいかな～と思ったから…そして、予想とおり二人がくっついてくれて本当にいいものを見せてもらいましたよ。ふふっ」

そういって、デジカメのボタンを押す。デジカメの画面からはさっきの二人の様子が流れていた。

「なっ…」

澪の顔が真っ赤になってムギからカメラを奪おうとした。
しかし紬はデジカメを後ろに隠しながら背を向けて逃げ出す。

「ちょっと、止まれムギ！早くデータを渡せ！」

澪がムギを追って走り出す。
その光景を見ていた唯も澪に向けて走りだした。

「こら、ムギちゃん！私にもデータをコピーくれ！千円出すから！」

「お前は取引すんな！」

澪が恥ずかしさに涙目になって唯に叫ぶ。いつの間にか唯は澪と並んで走っていた。
唯が澪のほうをちらっと見ながら言った。

「とりあえず、ムギちゃんを捕まってから話し合おう？」

唯が澪を通り過ぎて前に走りだす。
澪もその背中を追って走り出した。

「これで一件落着かしら。まぁ、でもデータは渡す気がないし、とりあえず逃げよう。うふふっ」

紬が二人を様子を肩越しで見ながらニコニコと微笑んでいた。そして、さらに速度を上げて走り出す。

後日、このデータが（わざと）梓に見られて大変なことになってしまうが、その話はまだ別の機会で。

END

ATOGAKI

こんにちは~ω
CUTEGです。.
ONIGIRIズの3冊目の同人誌になるけいおん！本でお会いできてうれしいです。
今回の原稿は手首が痛んでいろいろ苦労しましたが
けいおん！に対する協力な愛情でなんとか勝ち取りました！ωω
あたしの強い主張で唯×澪だらけの本になっちゃいましたがいかがでしたか？
プニプニな女の子たちがプニプニする本を描きたかっただけです！
かわいいお二人が描けることができてすごく楽しかったです。

ところで、本編の話ですが。もうちょっとお話が進んだらいいなぁと
思ったら終わってしまってちょっと残念でした。
最後の学園祭を見てちょっぴり泣いちゃいました。

律儀にここまで読んでくださった方、みんなありがとうございます。
次はもっといい本でお会いしましょ：)
Hyparさんもお疲れ様でした！

ではでは！

—CUTEG

オッス、オラ、Hypar！
はじめまして、こんにちは。
ONIGIRIズのけいおん！本いかがでしたか？
相変わらず、CUTEGさんの原稿が綺麗すぎで作業中に
いろんなところから汁が噴出されて困ってました。

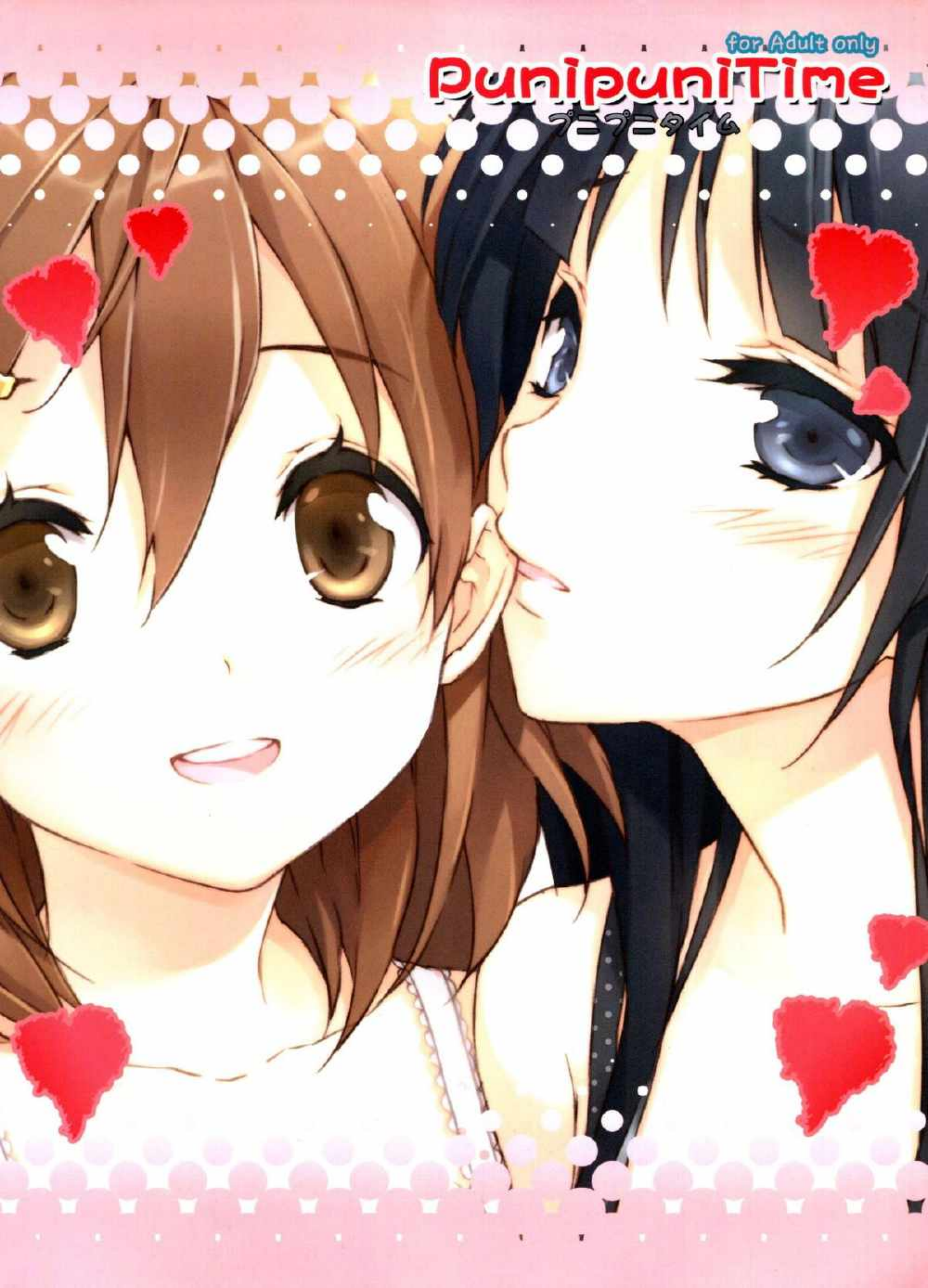
唯と澪のお話、楽しんでましたか？
楽しめましたらあなたも立派な紳士（淑女）だと思います。

手に取ってくれてありがとうございます。
ちなみにあずにゃんは(多分法的に)俺の嫁ですので手出さないでください。
異議がある人はメールください。
存分にあずにゃんがなぜ俺の嫁なのか語り合いましょう。

次の本でまた会いましょう。次にまた紳士淑女さんを満足させる
甘い百合本で皆さんを向かいに行きます。

それではありがとうございました。Hyparでした。

—Hypar


for Adult only
PunipuniTime
プニプニタイム